

親鸞仏教センター通信

2004.
June

第10号

2004年6月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

インターネット社会のもたらすもの

親鸞仏教センター研究員 藤 原 正 寿

数年前に、自分の部屋から一歩も出ず、インターネットだけで果たして生活できるか、というある男性の実験が話題になったことがあった。しかし今では誰も、そんな実験に興味を示すものはいない。インターネットさえあれば日常生活で必要なあらゆるものが手にはいることは、もはや当たり前のことだからである。衣食はもちろんのこと、本の注文、家賃、ガス、電気等の代金の振り込み、株の売買、電車や飛行機のキップ、宿の手配までおよそ手に入らないものはない。実際、この便利さは手に入れたら止められないほど快適なものでもある。インターネット（携帯電話、メールも含む）等の情報通信手段の急速な発展は、日常生活の様相を一変させたといっても過言ではない。

例えば、学校においても、学生は課題のレポートをメールで送るのであって、指導教授に直接手渡すことはない。先生も学生にメールで応答し、学生の成績評価を学校にメールで通知する。授業すらも、教室がなくとも自分の部屋でパソコンの画面を通して受講可能になりつつある。校舎がなくとも学校は成り立つのである。ある友人の教員から聞いた話では、学生のレポートの多くが、インターネットから得た情報によって書かれていて、しかも、インターネットで検索したとき、はじめに表示された情報をそのまま、コピー&ペーストで、瞬時に写し取ったものがそのままメールで送られてくるそうである。効率的な学習のためのシステムが、皮肉にも「自分で考える」という学問の根本をも揺るがせてしまっているのであろうか。

だからといって、一概にインターネットを拒否しようということを言っているのではないし、言うつもりもない。それにしても、日常生活のあらゆる場面が、誰とも接することなく成り立つということには、功罪があることを知っておかなければならないと思う。かつて、個人を縛りつけていた関係社会や制度から離れても生活が成り立つという意味では、仕事や勉学に地域や時間の格差がつかないということにおいては、インターネットに代表される情報手段の発達はとても有効である。一方で、あらゆる場面で誰とも接しないことは、煩わしさが無い反面、人の気持ちを感じとり、自分の気持ちを表現するという機会や能力をわれわれから奪っていく。良くも悪くも培ってきた文化・習俗、つまり地域共同体や親戚、家族という人間関係を切り裂くことによって、自分自身の存在を確かめるための大切な「場」を喪失させるのが、インターネット社会のもたらす罪であろう。そのことが、現代に得体の知れない恐怖と孤独をもたらししているのも事実である。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—濁世を超えて、濁世に立つ—」

凡夫に開く本願の花

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第23回から第25回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第23回では天親菩薩の『浄土論』の眷属功德と受用功德について、第24回では無諸難功德について、第25回では大義門功德について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者の方々と間で活発な質疑応答がなされた。ここでは先に行われた第22回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 蓮の花

仏教は、悟りを蓮の花、蓮華に喩えます。蓮華というのは「淤泥華」と呼ばれ、泥田、曇鸞大師はそれを「卑湿の淤泥」、湿って汚い泥と言って、凡夫の煩惱の喩えだと言うわけなのですが、そういう泥のなかに根をはって、茎を水面に出して、泥とはまったく想像もつかない色の花を咲かせる。泥田とはまるで異質の色、ピンク色あるいは真っ白や青い蓮華が開く。不思議なことですね。どうしてそんなことができるのかと思うのですが。

われわれ人間存在というものは、本当に汚い心で生きている。お互いに利用しようとか、心の裏には自分が得をしてやろうというもの、必ずくっついていて。そういうものを汚いと言われたら、われわれは立つ瀬がないのだけれども、仏教からすると、「そういう身であることを忘れるな」と教えるわけです。仏が悟りを開くということは、ある意味で、一切衆生を救いたいという願いそのものになることだと言われるわけですが、そういう清浄なる願いに立って

救おうとする相手は、まったく救いようのない煩惱の衆生である。煩惱の衆生とかかわったら、生半可な心では、そちらへ引きずり込まれてしまう。

ところが、蓮華というのは、まったくひどい状態から出て花を咲かせる。そういう仕事が、仏陀の仕事なのだと。きれいな場所を選んで咲く、これは当たり前な話だと。ところが、どうにも救いようのない地に根をはって、清浄な花を咲かせる。こうした仏陀のあり方を、蓮華のような清浄性で喩えるわけです。仏さまのお姿が、蓮台といって、蓮の華の上に立ち上がるというのは、そういう意味なのです。だから、「お前らは汚いから嫌だ」と言って、自分だけきれいなところへ行くというのは仏さまの心ではない。どれだけ煩惱の汚泥のなかにあっても、そこでこそ、本当の花を開かせようとする。そこには大きな矛盾がある。純粹清浄なるものと、濁って本当に汚いものとは絶対に矛盾する。その絶対矛盾を包んで、本当に成就しようという願いが、仏陀の願いなのです。

■ 歩まされてある自分

『浄土論』に「如来浄華衆正覚花化生」とあります。如来の浄土に生まれる衆生というのは、阿弥陀如来の正覚の花より化生すると。「化生」とは、卵生とか胎生などのいわゆる普通の生まれ方ではない。原因と結果が物質的に説明できない生まれ方を言う。浄土に生まれた衆生は、阿弥陀の正覚の花から生まれるのであって、人間の行為が報いて生まれるのではないのです。

自業自得の道理と言われますように、われわれからすると、自分の行為、自分の生活経験の結果で、次の自分に成っていくと。自分が縁でもないことをすれば、次に自分がそれで苦しむ。周りに迷惑をかければ、周りの人間から逆にやり返されて、結局、自分が痛い目に遭う。だから昔から、仏教のものの見方として、業の報い、「業報」という言い方をする。自分の生活経験の報いで、次の自分に成ると言うのです。

ところが、他力の救いは、この自業自得ではたすからないのだと言う。人間は、皆、地獄に墮ちるような行為を繰り返している。深い罪のいのちを生きている。自分は悪いことをしていないというのは、思い込みでしかない。このような人間を阿弥陀如来がたすけてくださるのだと。阿弥陀如来の本願が、「お前は、いらんことを考えないでよい。そのまま任かせなさい」と、こう呼びかけてくださる。論理として言えば矛盾である。自業自得の論理に矛盾している。けれども、自業自得で放っておいたら、人間は、誰もたすからない。

安田理深先生はよく言っておられました。あなたたちは、自分の意志でここに聞法しに来たのだと思っているか知らんが、しかし、ここに来ることができた背景ということ、よくよく考えてみなさいと。家を出るときに、誰かが尋ねてきたら、もう来られないではないか。誰も尋ねてこなかった。緊急の用事もできなかった。そういうことも、縁なんだと。あなたを来させたものは何だ。好きで来たのか。必ずしも好きじゃなからうと。もっと好きなことは他にあるかも知らん。何でここに来たのだ。歩ませるものがあるからだ。聞きに行きたいと思わせるものがあるからだ。そこから聞法は始まっているのだと。そこに、もう法蔵菩薩が歩んでいるのだ。ここに来てるときだけが、聞法ではないと。こういうふうにおっしゃっていました。

これは、自分の思いよりも、もっと深いものが人間を生かし、人間を歩ませているのだという見方ですね。無数の条件が支えている。全部支えられてあったのだ。自分も歩まされてあつ

たのだと。そのことをとおして、人間の妄念をひるがえ翻せと。人間の妄念を破らせようという、そういう真理のはたらき、それを「本願」という言葉で教えるわけです。

■ 本願の花が開くということ

曾我量深先生は、「浄土往生、往って生まれると言うけれど、往って生きるというふうに言ってみよう」とおっしゃっておられた。浄土の生は、そこで昼寝をするのではない。阿弥陀如来の願いは、如来の本願に感動して、その願いをもって菩薩道を行じてほしいということ、それが浄土の生である。だから、本願に感動して生きる苦悩の衆生が、阿弥陀如来の願いを証明するのです。証明すると言っても、自分が覚りを開いて何か教えるという、そういう意味ではない。愚かな凡夫として、阿弥陀如来の本願がかたじけないという心が開けるならば、阿弥陀如来の浄土の仕事を、本願を信じた凡夫が実証するということになる。

親鸞聖人が、『教行信証』の「行巻」に引いておられる偈文げもんのなかに、「此の土で一人の衆生が念仏すると、彼の土で一つの蓮華が生ずくこの界に一人、仏の名を念ずれば、西方にすなわち一つの蓮ありて生ず」(『真宗聖典』180頁)という偈うたがあります。此の土で、われわれの生活のなかに南無阿弥陀仏という声が起こる。そうすると浄土で蓮華の花が開く。これは詩的な語り方ですね。本願を信ずる衆生がいることが、本願の花が開くということなのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2004年6月7日(月)午後6時30分～9時
7月 休講します

8月4日(※) 同上

場所：有楽町・東京国際フォーラムG407(6月)G405(8月)
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

なり。よろこぶべきところをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。

しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんざるやらんとところほそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。

久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩惱の興盛にそうろうにこそ。

なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきで、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあわれみたまうなり。

これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じそうらえ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」と云々

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

よ」とおっしゃっているのですから、弥陀の他力の悲願は、このような私たちのためなのだと受け止められて、いよいよ頼もしく感じられるのです。

また、阿弥陀の浄土へ喜び勇んでゆきたいという心が起こらなくて、ちよつと病氣にでもなれば、死ぬのではないかと心細くなることも煩惱がはたらくからです。

永遠の過去から今日まで、生まれ変わり死に変わりしているこの人間界は、どれほど苦悩に満ちていても捨て難く、どれほど安らかな世界だと聞かされていても、いまだ生まれたことのない阿弥陀の浄土が恋しく思えないのは、本當によく煩惱が盛んに起こっているからなのです。

しかし、どんなに名残り惜しく思えても、この世の縁が尽きて、なすすべなくいのちの終焉を迎えるときに、阿弥陀の浄土へまいることができるのです。喜び勇んで浄土へまゐりたいという心のないものを、ことに哀れんでくださるのです。

このようなわけですから、いよいよ阿弥陀の大きな悲願は頼もしく感じられ、弥陀の浄土への往生は間違いないと思われまします。おどりが上がるような喜びの心も起こり、また喜び勇んで浄土へまゐりたいという心があるならば、それではかえって、煩惱がないのではないかと怪しく思われましよう」ととおせになりました。

語 註

①【踊躍歡喜】勇んでおどりが上るほど心身ともに喜ぶこと。『教行信証』(「行巻」『大経』引文)には「歡喜踊躍、乃至一念」とある。

②【唯田房】親鸞の直弟。『歎異抄』の著者といわれている。③【煩惱】心身をわづらわし、悩ます精神作用。親鸞は「煩惱は、みをわづらわす。悩は、こころをなやます」という(『唯信鈔文意』)と述べている。

④【煩惱具足の凡夫】『涅槃經』には、釈迦如来が阿闍世を一切衆生の代表者として「煩惱等を具足せる者なり」と呼びかけている。(『教行信証』「信巻」)

(訳・語註：親鸞仏教センター)

『anjali』第7号および

『現代と親鸞』第5号を刊行

このたび、情報誌『anjali』第7号(写真上)、並びに研究誌『現代と親鸞』第5号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第7号では、宗教学者の脇本平也氏、文芸評論家の竹田青嗣氏、物理学者の國府田隆夫氏、医師の鎌田實氏、社会学者の有賀夏紀氏、東京大学大学院教授の高橋哲哉氏、子どもの虐待防止センター理事の広岡智子氏、放送衛星システム顧問の斎藤勝治氏など、10名の各専門分野の方々に、現代社会と人間の諸課題について、ご執筆いただいています。

一方の研究誌『現代と親鸞』第5号では、研究論文(藤井淳元嘱託研究員)、「現代と親鸞の研究会」から神学者の浅見定雄氏、理学療法士の三好春樹氏、教育評論家の尾木直樹氏の問題提起と質疑。「現代における人間像に学ぶ研究会」から明治大学助教授の諸富祥彦氏のインタビュー。また、第1回「親鸞仏教センターのつどい」及び「親鸞思想の解明」から本多弘之所長の講演及び問題提起(5講座分)を掲載しています。



『聖典』の試訳（現代語化）

教えの道筋が、論理として向こう側にあるとき、それは人間を生かす力にはならない。生かす力にならないばかりか、逆に人間を縛るものともなる。教えの論理のとおりに自己を当てはめようとしている段階では、論理は目標であり、人間を呪縛する。目標ということは、生きる指針にはなっても、教えそのものを生きることにはならないということである。それほどまでも、目標であつて、現実にはなり得ていないという矛盾をもつ。その論理が、自己の腑に落ちたときに、初めて生きる力となり、また論理から自由になることができる。この第九条は、親鸞の応答という表現形態をとりながら、教えの論理の呪縛から解放された唯円の生々しい感動を読み取ることができる。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第九条〉

原文

「念仏もうしそうれえども、踊躍^①歡喜のころおろそかにそうろうこと、またいそぎ浄土^{じやうど}へまいりたきころのそうらわぬは、いかにとそうろうべきことにてそうろうやらん」と、もうしいれてそうらいしかば、「親鸞^{らん}もこの不審^{ふしん}ありつるに、唯円^②房おなじころにてありけり。

よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべき

現代語訳

「念仏を称えていまして、かつてのようにおどりが上がるような喜びが感じられないのはどうしてなのでしょう？ また、喜び勇んで浄土へゆきたいという心の起こらないのは、どうしてなのでしょう？」と親鸞聖人にお尋ねしましたら、「私（親鸞）も、このことが疑問でありました。唯円房、あなたも同じ疑問をもたれていたのですね。

このことをよくよく考えてみると、教えの道筋からいえば、天におどり地におどるくらいに喜ばなければならぬはずですが。しかし喜びの感情が起らないからこそ、よりいっそう弥陀の浄土への往生は間違いないといたすべきでしょう。なぜならば、喜ぶはずの心を喜ばせないようにしているのは、煩惱がはたらくからです。

如来は永劫の昔から私たちを見通されて『煩惱具足の凡夫

親鸞仏教センターの動き

（2004・3～5）

■2004年

- 3・1 『親鸞仏教センター通信』第9号を発行。
第94回研究会（研究・交流・出版の協議と企画）。以降、12回の研究会を開催。
- 3・5 第38回『聖典』の試訳『歎異抄』研究会。以降、6回の研究会を開催。
第19回清沢満之研究会。鼎談「吾人の価値は如何」満之は現代に何を語りうるか」。
- 3・11 東京経済大学教授・今村仁司氏、東京大学大学院教授・竹内整一氏、親鸞仏教センター所長・本多弘之、司会・田村晃徳研究員（台東区・上野精養軒）
第20回清沢満之研究会
- 3・12 親鸞聖人ご命日のつどい
- 3・15 第39回英訳『教行信証』研究会。以降、5回の研究会を開催。
第26回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
田村晃徳研究員が大谷大学講師に就任。
- 4・1 人事発令（伊東恵深研究員）
- 4・2 現代における人間像に学ぶ研究会②「競争社会と現代の人間」岐阜大学医学部助教授・高岡健氏（文京区・東京ガーデンパレス）
- 4・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 4・22 第2回「親鸞仏教センターのつどい」（親鸞仏教センター、文京区東大赤門隣・学生会分館）
- 5・7 第27回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）
親鸞聖人ご命日のつどい
- 5・14 『聖典』第7号、「現代と親鸞」第5号、
『親鸞仏教センター通信』第10号を発行。
- 6・1 『親鸞仏教センター通信』第10号を発行。

現代と親鸞の研究会・第11回

今日の子どもと教育の危機とは

教育評論家 尾 木 直 樹



尾木直樹 氏

2003年9月18日、東京ガーデンパレス（文京区）において、教育評論家の尾木直樹氏を迎え、「現代と親鸞の研究会」を開催した。

競争主義がはびこる教育現場のさまざまな問題を鋭く捉え、新しい時代にふさわしい、子どもと大人と地域の共同参画を主軸とした教育改革を提唱する尾木氏に、「今日の子どもと教育の危機とは」をテーマに語っていただいた。ここにその一部を紹介する。（本多雅人）

■ 競争主義と学力低下の議論

教育界のあらゆる領域で競争が激しくなっています。では、いまの競争主義というのはどういう状況かということですが、例えば、都立の進学対策校であれば、「国公立難関大学100人以上、現役合格率60%」と、数値目標を掲げさせられるわけです。そのために、そこに生徒をあてはめていき、それによって、教師、学校が評価されていくのです。つまり、成果主義になっています。一定の到達レベルに全員が達するための競争というのであれば結構なことだと思いますが、他者と差をつけて自分が一位になることを喜ぶような競争というのは、コップのなかの争いであって、ほとんど意味がありません。むしろ、その競争の結果である順位に意味が置かれてしまい、そのプロセスで習得されるものが薄まってしまう危険性があるように思います。両者には相当な違いがあって、差別化の競

争は非常に危険です。

数値目標を掲げた成果主義が、こんなに蔓延してきてしまった背景には、“学力低下”への不安があります。しかし、いま日本の子どもたちの学力は、国際的にいうと依然としてトップクラスです。しかし、学力問題で重要なのは、成績ではなく、学習意欲というか、学問研究に対する夢や希望や情熱です。ところがこの点では、どのデータを見ても日本は最下位です。それは、学習時間の低下ということにも、端的にあらわれています。経済的な不況のなかで、これまで高度経済成長を支えてきた学歴社会が崩壊し、私たちのころのような学歴のメリットは、ほとんどなくなってしまったからです。しかし、興味のあることを勉強したいと思っている子どもたちは実に多いのです。ですから、「21世紀の現代にふさわしい学力とは何か」をしっかりと議論することが大切です。

■ パートナーシップの構築

現代の若者たちのベクトルは“未来”に向いていません。“自分”のほうを向いています。未来のために生きるのではなく、いまが大切なのです。いまが勝負なのです。つまり、今日が楽しくて自由にのびやかに過ごせれば、きっと明日も楽しいかもしれない、明日も楽しかったら1年後も楽しいかもしれない、というように、「いまから未来へ」とつないでいくわけです。ベクトルの方向が私たちのころとは逆なのです。ですから、「対極を生きる子どもたち」という言い方ができるのではないかと思います。しかし、ベクトルが逆だということがわか

れば、今日の若者たちもそれなりに的確な生き方をしていると理解できます。

いまは、先行きのわからない不安な社会状況ですから、いまを楽しく生きるという考え方も、当然、理解できるわけです。ただ、その楽しさのなかに、未来を切り開いていく楽しさというものをもっていなければ、それは単なる刹那主義に陥るということを、私たち大人は十分に伝えていく責務があると思います。

それが十分にできていない現段階で、いま、いろいろな少年犯罪が起きているわけです。だから、成績のいい子が事件を起こしています。ある意味で、それだけしわ寄せが成績のいい子どもたちに来ているのだと思います。これでは、一生懸命にがんばっている子どもたちは爆発もします。思春期の、特に17歳で将来の進路を決めていくときに、例えば大学に入るとか、就職にどこを選ぶかというときに、社会が見えてくると同時に、自分自身も初めてリアルに見えてくる。そこでの絶望感や挫折感にはとても大きいものがあります。だから、そういう意味では非常にわかりやすいのです。しかもそういう目で見たときに、すごく現代の子どもたちが理解できると思います。

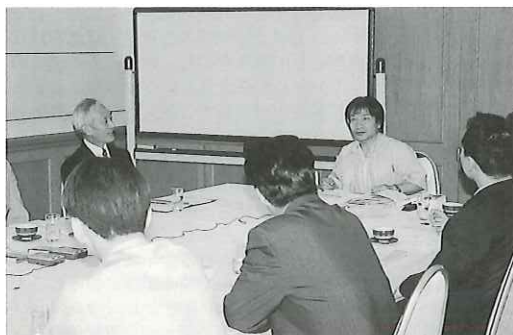
このような若者たちに、大人たちが何かを教えていくとき、大人自身が、いま本当に自信をもって教えるものを、政治的にも、文化的にも、経済的にも完成していないと思います。それならば、私は「パートナーシップ」と言うのですが、若者たちのパワーをもらいながら、いっしょにこの国を、あるいは地域をつくろうではないかという提案をしています。学校であれば、「先生たちも一生懸命に考えるけれど、君たちも提案してほしい。いっしょに運動会を成功させようじゃないか」というような、共同で創造する学校づくりということです。いわゆる「子ども市民」、もっと大きいスケールで言えば「地球市民」というような言葉がよく使われますが、そういう感覚で捉えるならば、現代では、子どもも大人もある意味で対等であろうということです。

日本の子どもたちの自己肯定心情（セルフエスティーム self-esteem）は極端に低いと言われています。自己肯定心情が低い子どもが、お父さんやお母さんを愛したり、いじめられている子に同情心や正義感から「やめなよ」と言ったり、あるいは困難な課題に挑戦する意欲などが湧いてくるはずがないのです。自分を愛していない子が、他者を本当に愛するということはありませんのではないのでしょうか。

大人と子ども、社会と子どもたちとの新たな関係性を構築することによって、子どもたちの自己肯定心情が高まってくれば、自己責任感も出てくるし、そこから、参加した大人や社会に対する責任感や信頼感ももてるようになるのではないのでしょうか。そうなのはじめて、本当の意味でモラルを引き継ぐことができるのだらうと思っています。（文責：親鸞仏教センター）

※尾木直樹氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第5号（6月1日号）に掲載します。

尾木 直樹（おぎ なおき）臨床教育研究所「虹」所長 1947年、滋賀県生まれ。早稲田大学卒業。法政大学教授、早稲田大学大学院客員教授。高校・中学校教師として22年間に渡り、創造的な教育実践を展開。また講演、テレビコメンテーター、新聞・雑誌への執筆等で活躍されるほか、実践的でタイムリーな調査・研究活動とともに、子育てセミナーの開催、教育相談、カウンセリングにも取り組まれている。著書に、『学力低下』をどうみるか』『学級崩壊』をどうみるか』『学校は再生できるか』（以上、NHK ブックス）、『子どもの危機をどう見るか』（岩波新書）、『競争より「共創」の教育改革を』（学陽書房）、『子どもの目線』（弘文堂）など多数。また、『アンジャリ』第5号（親鸞仏教センター）に、「今日の子どもと教育の危機とは」を執筆いただいている。

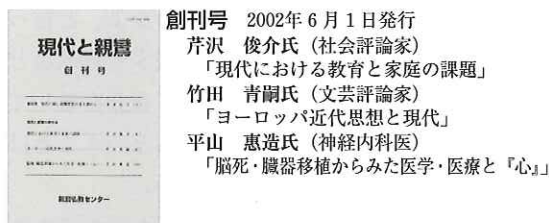


「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

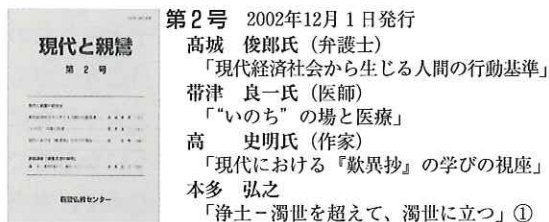
親鸞仏教センター刊行物の紹介

親鸞仏教センターでは、研究誌『現代と親鸞』（A5版、年2回）を発刊し、研究論文や研究会記録、また連続講座等を掲載し、研究成果を世に問う活動を進めています。主な内容は下記のとおりです。

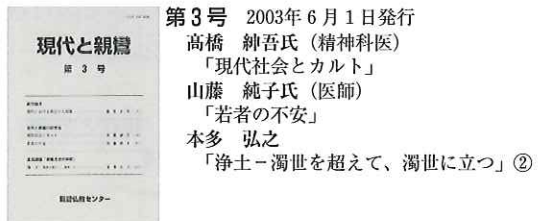
なお、定期購読（送料込みで一冊1,200円、振込手数料は購読者負担）をご希望の方は、〒、住所、氏名、電話番号等を明記のうえ、ハガキ・FAX・E-mailのいずれかで、親鸞仏教センターまでお申し込みください。



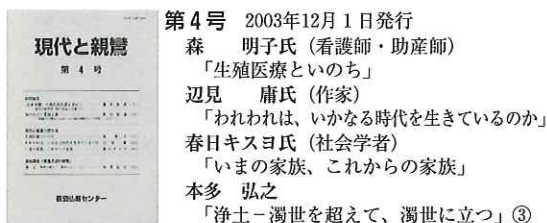
創刊号 2002年6月1日発行
 芹沢 俊介氏（社会評論家）
 「現代における教育と家庭の課題」
 竹田 青嗣氏（文芸評論家）
 「ヨーロッパ近代思想と現代」
 平山 恵造氏（神経内科医）
 「脳死・臓器移植からみた医学・医療と『心』」



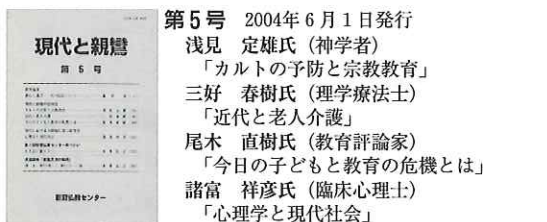
第2号 2002年12月1日発行
 高城 俊郎氏（弁護士）
 「現代経済社会から生じる人間の行動基準」
 帯津 良一氏（医師）
 「『いのち』の場と医療」
 高 史明氏（作家）
 「現代における『歎異抄』の学びの視座」
 本多 弘之
 「浄土ー濁世を超えて、濁世に立つ」①



第3号 2003年6月1日発行
 高橋 紳吾氏（精神科医）
 「現代社会とカルト」
 山藤 純子氏（医師）
 「若者の不安」
 本多 弘之
 「浄土ー濁世を超えて、濁世に立つ」②



第4号 2003年12月1日発行
 森 明子氏（看護師・助産師）
 「生殖医療といのち」
 辺見 庸氏（作家）
 「われわれは、いかなる時代を生きているのか」
 春日キスヨ氏（社会学者）
 「いまの家族、これからの家族」
 本多 弘之
 「浄土ー濁世を超えて、濁世に立つ」③



第5号 2004年6月1日発行
 浅見 定雄氏（神学者）
 「カルトの予防と宗教教育」
 三好 春樹氏（理学療法士）
 「近代と老人介護」
 尾木 直樹氏（教育評論家）
 「今日の子どもと教育の危機とは」
 諸富 祥彦氏（臨床心理士）
 「心理学と現代社会」
 本多 弘之
 「広大会に独り立つ」
 本多 弘之
 「浄土ー濁世を超えて、濁世に立つ」④



情報誌『an'jali (アンジャリ)』
 思想、科学、経済、教育、医学など、各専門分野で活躍される方々に現代の課題とその苦闘を執筆いただき、21世紀の確かな時代の方角を探る情報誌（B5版、年2回）です。「アンジャリ」は、古代インドのサンスクリット語で「合掌」を意味します。



機関紙『親鸞仏教センター通信』
 研究内容や交流活動など、親鸞仏教センターの活動を紹介する機関紙（B5版、年4回）です。

※『an'jali』および『親鸞仏教センター通信』の定期購読を受け付けています。ご希望の方は、同センターまで。

●新スタッフの紹介

いとう えしん
 研究員 伊東 恵 深

1977年生まれ。大谷大学大学院文学研究科博士課程満期退学（真宗学）

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

親鸞からあなたへのメッセージ

あ と が き

親鸞仏教センター研究員の田村晃徳氏が、2004年4月1日付で、大谷大学講師に就任した。氏は、2年間、「清沢満之研究会」を担当し、「宗教哲学概論」を中心に「現代」と「親鸞」のつながりを哲学の視座から探究してこられた。東京から京都へとその学びの拠点は変わるが、いよいよ親鸞聖人の思想・信念を現代社会にとっての大切な思想として掘り起こし、時代社会の関心の言葉で表現していただきたいと心から念じている▼本年1月18日、元大谷大学教授の坂東純先生が71歳でご逝去された。葬儀は2月13日、東京・上野の報恩寺で営まれた。先生は、東西霊性交流などを通じてキリスト教関係者との交流も深く、仏教伝道協会の英訳大蔵経編集事業にも大きな力を注がれた▼先生に初めてお会いしたのは、1978年、大谷大学の演習（ゼミ）であった。先生の温和なお姿がいまも忘れられない。そんなご縁もあって、親鸞仏教センターの開設以前から、東京における学事施設の構想については、何度もお伺いし、その都度、笑顔で快く相談にのってくださった。先生はいつも、「まずは建物より中身ですよ」とおっしゃられ、センターの開設にあたっては、世界に開かれた親鸞仏教センターという願いから、「The Center for Shin Buddhist Studies」とい

う英語での名称をお付けくださった。また、先生が師事された鈴木大拙先生の英訳『教行信証』をテキストにした研究会発足とともに、講師をお引き受けいただき、かつ、『アンジャリ』のご執筆（第6号）など、随分とお世話になった。ここ数年は、体調も思わしくないなか、愛用のステッキと拡大鏡を片時もはなさず、仏道の厳しさを語り続けてくださったことも印象深い▼先生は『鈴木大拙とは誰か』（岩波書店）のなかで、鈴木大拙先生を偲んで、「元来、教育者や思想家の活動は息の長いものである。即刻効果が現前に到来するというものではない。現に世界中のどこかで、鈴木先生の著書に接して、菩提心を触発されている者もあるかも知れない。鈴木先生の西欧世界に対する思想的影響は、現在までの状況から見て、今後もわれらの推測を絶するものがあるだろうことは確かである。その広さ、深さはわれわれの憶測を許さぬものがある」と述べられている。坂東先生に直接触れた者は、同様な実感をもたれるのではないだろうか。他宗教との対話、宗派を超えた仏教伝道など、日本の、いや世界の仏教界にとっても大切な方であったとあらためて教えられた。ここにご生前のご功勞を憶念し、謹んで哀悼の意を表するものである。（長谷岡